



開館 60 周年記念・平成 25 年秋季特別展

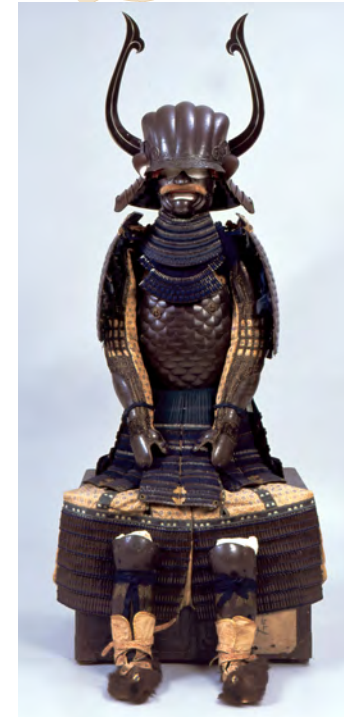
かつちゅう

甲冑の美

- 主催 福井市立郷土歴史博物館
- 会場 2階 企画展示室
- 会期 平成 25 年 10 月 11 日(金)

～ 11 月 24 日(日)

伝来の甲冑



平安時代以降、独特の手法と構成で発展した日本の甲冑は、戦国時代以降、合戦のなくなった江戸時代に至っても、さまざまな発展を遂げます。伝統にとらわれずさまざまな構造・デザイン・新素材からなる「新機軸」の追及が行われ、また一方で鎌倉・室町期の古式の甲冑を忠実に模しつつさらに新形式を取り混ぜる、豪華な復古調甲冑の「リヴァイヴアル」がブームとなるなど、この時代の甲冑の多様さ・華やかさは現代のモード系ファッションを見るようです。福井藩主・松平家でも、歴代の藩主が趣向を凝らした甲冑を制作させています。

【写真 左】魚鱗具足(越葵文庫) 7代藩主・松平吉品が制作させた甲冑。鉄打ち出しの鱗札を鋳で連結した新機軸の甲冑。

【写真 右】赤韋威大鎧(個人蔵) 尾張藩重臣・大道寺家伝来の甲冑。平安時代末期の古式の大鎧を忠実に復元している。



越前の甲冑師たち

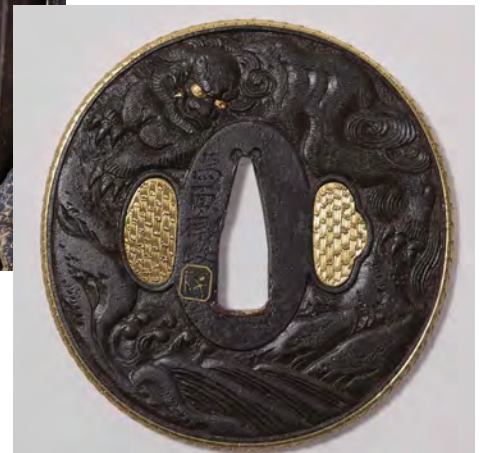
戦乱うちつづいた戦国時代に比べ、江戸時代には甲冑の需要は格段に減少したため、甲冑師たちは刀の鐔や馬具といった他の工芸品の制作に注力するようになり、甲冑をフルセットで多数制作することができる工房は、江戸や京などの大都市に限られるようになっていきます。

しかし福井では「魚鱗具足」をはじめ甲冑の優品を生み出した越前明珍派、馬面(免)派や、名刀工・帛徹を生んだ長曾祢鍛冶など、有力な工人集団が江戸時代を通じて活躍しています。これら越前の甲冑師たちにも注目します。



【写真左】紺糸威桶側鋳打鉄五枚胴具足(胴裏銘 越前住長曾祢藤次郎光正作; 本多富正所用; 個人蔵) 戦国の遺風をのこす武骨な甲冑。

【写真下】唐獅子牡丹図鐔(銘 馬面序政(金印); 個人蔵) 甲冑の鉄錆地と同様の鉄味をもつ甲冑師の鐔。



関連行事

【学芸員によるギャラリートーク (展示解説)】
(参加自由 ※要企画展チケット)
10月12日(土)・10月20日(日)・10月27日(日)・
11月10日(日)・11月17日(日)・11月24日(日)
いずれも14:00より

展示解説シート No.78
平成 25 年 10 月 11 日発行
福井市立郷土歴史博物館
〒910-0004 福井市宝 3-12-1
電話 0776-21-0489
F a x 0776-21-1489
担当: 松村知也
印刷 / 櫛小川印刷

甲冑のみどころ

甲冑は、美術工芸のさまざまな分野の技を結集して作り上げる、いわば当時の美術工芸の結晶ともいえるものです。

今回の展示資料を例にあげて、その主な見どころをご紹介します。

あなたが注文主なら、どんな甲冑を着てみたいですか？そんな目線で鑑賞してみても面白いかもしれません。

その1：兜のデザイン

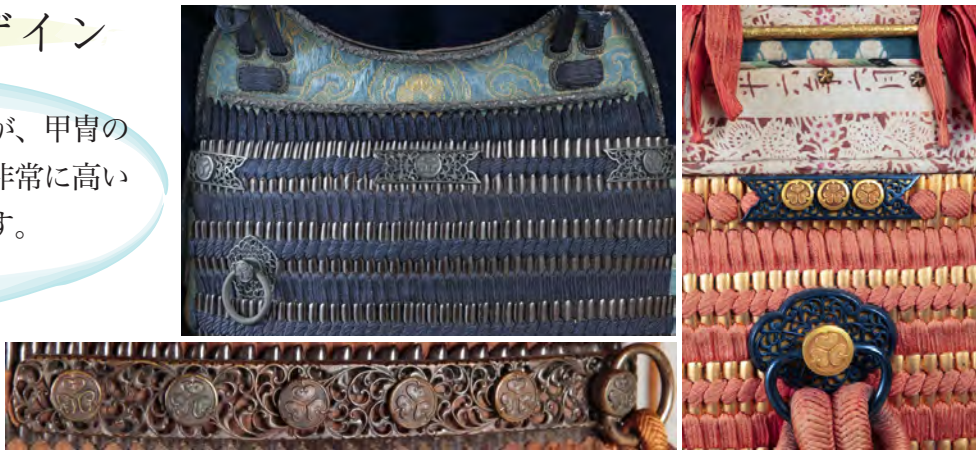


動物・神仏・自然・古典など、さまざまなモチーフを見事に形にした兜。多数の鉄板を矧ぎ重ねた重厚なもの、巧みに打ち延ばして独自の形状を作ったもの、張り重ねた紙に漆をかけて造形した「張懸」など、兜鉢の材質・形状や構造は非常に多様です。

また、前立・脇立・頭立など装飾のユニークさも目を見張るものがあります。そこには注文主のこだわりもさまざまあったことでしょう。

その2：金具のデザイン

小さくてあまり目立ちませんが、甲冑の各所に使われている金具には、非常に高い金工の技術を見ることができます。



その3：威毛の美しさ



小札を横につないで板にしたものを、組紐や革紐を使って上下に綴じ合わせていくことを「威」といい、この威に使う紐のこと、またその紐が減されて規則正しく並んだ様子を「威毛」と呼びます。さまざまな色糸で威した色目の美しさを強調するのは、海外にはない、日本の甲冑の大きな特徴の一つです。

【用語解説】

伊予札（いよざね）… 甲冑を構成する小札の一種。鉄製の小札をへりの部分を浅く重ねてつづるように作ったもの。少ない枚数で軽くかつ安価に作れる。

絵韋（えがわ）… 獅子・牡丹・不動などの文様の彫り型を当て、藍や赤で染めた革。

桶側胴（おけがわどう）… 横長あるいは縦長の鉄板や革板を並び留めて作った胴。

威（おどし）… 小札で構成した板を革や糸の緒（紐）で上下に結び合わせることで「緒通し」から変化した語。

威毛（おどしげ）… 甲冑の小札を威した緒。あるいは威し立てた緒が並ぶ様子。

片切彫（かたきりぼり）… 線の片側を面に垂直に彫り他の片側を斜めに彫る彫金法。

鉄錆地（かなさびじ）… 鉄地を錆仕立にしたもの。

亀甲金（きっこうがね）… 亀甲形の鉄板。

羅紗（らしゃ）… 毛織物の一種。ウールを密に織って起毛した厚手の生地。桃山期、南蛮船がもたらした。

毛引威（けびきおどし）… 威しの方法の一種。小札一枚一枚に対して威毛を満遍なく威す手法。

毛彫（けぼり）… 細い線で模様や文字を彫ること。

小具足（こぐそく）… 兜・胴・袖以外の甲冑の付属部品のこと。

雑賀鉢（さいかばち）… 室町時代末期に登場した兜の独特の形式。7～8枚の鉄板を矧ぎ合わせて、矧ぎ目に花菱形の座を置いた星鉾を打つ。紀伊国雑賀が発祥といわれる。

赤銅（しゃくどう）… 銅に3～5%の金を加えた合金。色上げ（発色処理）で青味がかった黒色を呈する。

素懸威（すがけおどし）… 威しの方法の一つで、間隔をおいて菱形に交差させながら緒を二本ずつ垂直に威していく手法。

頭形（ずなり）… 3枚ないし5枚といった少ない枚数の鉄板を矧ぎ合わせてつくられた兜の形式。頭の形に近いことからこの名がある。

壺袖（つぼそで）… 甲冑の袖の一種。上部の幅が広く、下の方がしだいに狭く作られている。

唐冠形（とうがんなり）… 古代中国の官人が使用していた冠を模した形状。

当世具足（とうせいぐそく）… 大鎧・胴丸・腹巻といった室町時代までの定型的な形式にこだわらず機能的に改良していった結果、それまでの甲冑と異なる多様な形式で展開した室町末期以降の甲冑のこと。

胴丸（どうまる）… 平安時代末期以来の鎧の形式の一つ。胴の右側を引き合わせる形式で、下半身を防護する草摺が八枚に分かれる。大鎧が「式正」の鎧なのに対し、胴丸は軽武装の一種で、徒歩で行動するのに適している。当世具足で同様の構造のものは、「丸胴」と呼び区別することもある。

魚々子（ななこ）… 切先の刃が輪状になった魚々子鑿で細粒の円形を密に陰刻して表す技法。そのあとが魚の卵に似るところからきた名称。

二方白（にほうじろ）… 兜鉢の正面とその対面となる背面の板を鍍金（金メッキ）で装飾したもの。さらに左右の板を鍍金で装飾したものは四方白という。

縫延（ぬいのべ）… 伊予札など、端部がわずかに重なった小札を横縫いすること。

布目象嵌（ぬのめぞうがん）… あらかじめ地面に布目状の鑿目を施し、針状の金や金箔などを嵌入する象嵌方法。

白熊毛（はぐまけ）… 中央アジア産の牛の一種・ヤクの白毛。甲冑の装飾として多用された。

八双金物（はっそうかなもの）… 兜の鍔最上段や、袖や胴の化粧板に付く細長い装飾用の金物。

菱縫（ひしぬい）… 甲冑の袖・草摺、兜の鍔などの小札板の最下段に、補強と装飾をかねて×形に縫った綴じ目。

本小札（ほんこざね）… 当世具足の切付小札など省略された札板の製法に対し、旧来の製法である、細長い小札を1枚ずつ作って横縫いで綴じ合わせた札板。

耳糸（みみいと）… 小札板の両端を通す緒。

鎧着初め（よろいきぞめ）… 武家の男子が13～14歳に達した時に初めて鎧（具足）を着用する儀式。「具足始め」ともいう。元服とほぼ同時期に行われるが、厳密には別の儀式。

〇枚胴（〇まいどう）… 胴の本体を2～6枚程度に分割し、蝶番で繋ぐことで脱着を容易にした形式の胴。